

# 法華寺旧境内の調査

## — 第504次

### 1 はじめに

本調査は個人住宅建設に先立つ発掘調査である(図255)。調査地は、法華寺旧境内の南辺に該当し、二条条間北小路推定位置にあたる。住宅建設敷地内において、南北12m、東西2mの調査区を設定し調査を開始した。調査の過程で南側に瓦敷と考えられる遺構が検出されたため、南西にL字状の拡張区(5㎡)を設けた。調査面積は29㎡。調査期間は2012年10月16日から11月5日までである。

### 2 基本層序

上から表土および造成盛土(約40cm)、整地土(約20~30cm)、地山の順で堆積する。整地土は、赤褐色土および灰黄褐色粘質土で、両者とも瓦片を含む。地山は、黄褐色粘質土であり、遺物を含まない。それぞれの標高は、整地土上面が61.8~61.6m、地山上面が61.6~61.2mで、両者ともに北から南に向かって標高を下げる。遺構検出面は、近世以降のものを除くと、整地土である赤褐色土上面か、その下層の灰黄褐色粘質土上面あるいは地山面である。以下では、前者を上層遺構、後者を下層遺構として、記述を進める。

### 3 検出遺構

上層遺構には、柱穴1基、東西溝4条、下層遺構には、瓦敷1基、東西溝1条、土坑1基などがある。両者とも奈良時代のものである。このほか表土下すぐに、近世以降の井戸や土坑が多数検出された(図257)。

#### 上層遺構

二条条間北小路SF9060・北側溝SD10285・南側溝SD10286 SD10285は、調査区北端から6m付近で検出された素掘溝。幅1.5m以上。南肩は後世の大土坑SK10292に切られる。北肩では溝の掘込面から深さ約30cmのところで傾斜が変換する。上方の傾斜が緩やかな部分は、別遺構の可能性もあるが、下方の溝肩ラインと並行することから、ここでは一連のものとして捉えた。赤褐色土上面との比高差約0.9m。溝埋土である灰砂層は、下層にのみ確認で

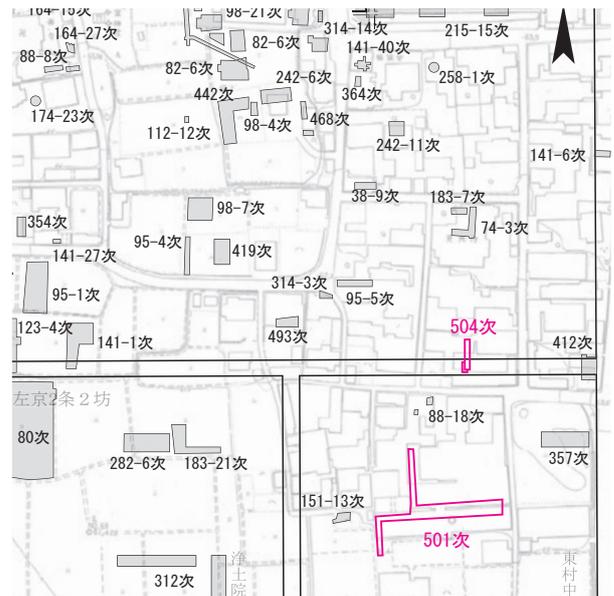


図255 第504次調査区位置図 1:4000



図256 調査区全景(北から)

き、その下面で完形の平瓦が5点出土した。後世の小穴によって一部が壊されているが、溝底の北肩に平瓦が凸面を添わせるように貼り付いていた(図259)。これらは、溝の護岸用に敷きこまれた可能性がある。溝底の標高は60.8m。504次調査区から50m東方の第412次調査区で検出された同側溝の標高が60.5mであり、東流すると考えられる。SD10286は、調査区南端で検出された素掘溝。北肩のみを確認した。幅0.6m以上。赤褐色土上面からの比高差約0.7mである。土器、瓦の小片が出土した。SD10285とSD10286とは、推定位置から二条条間北小路

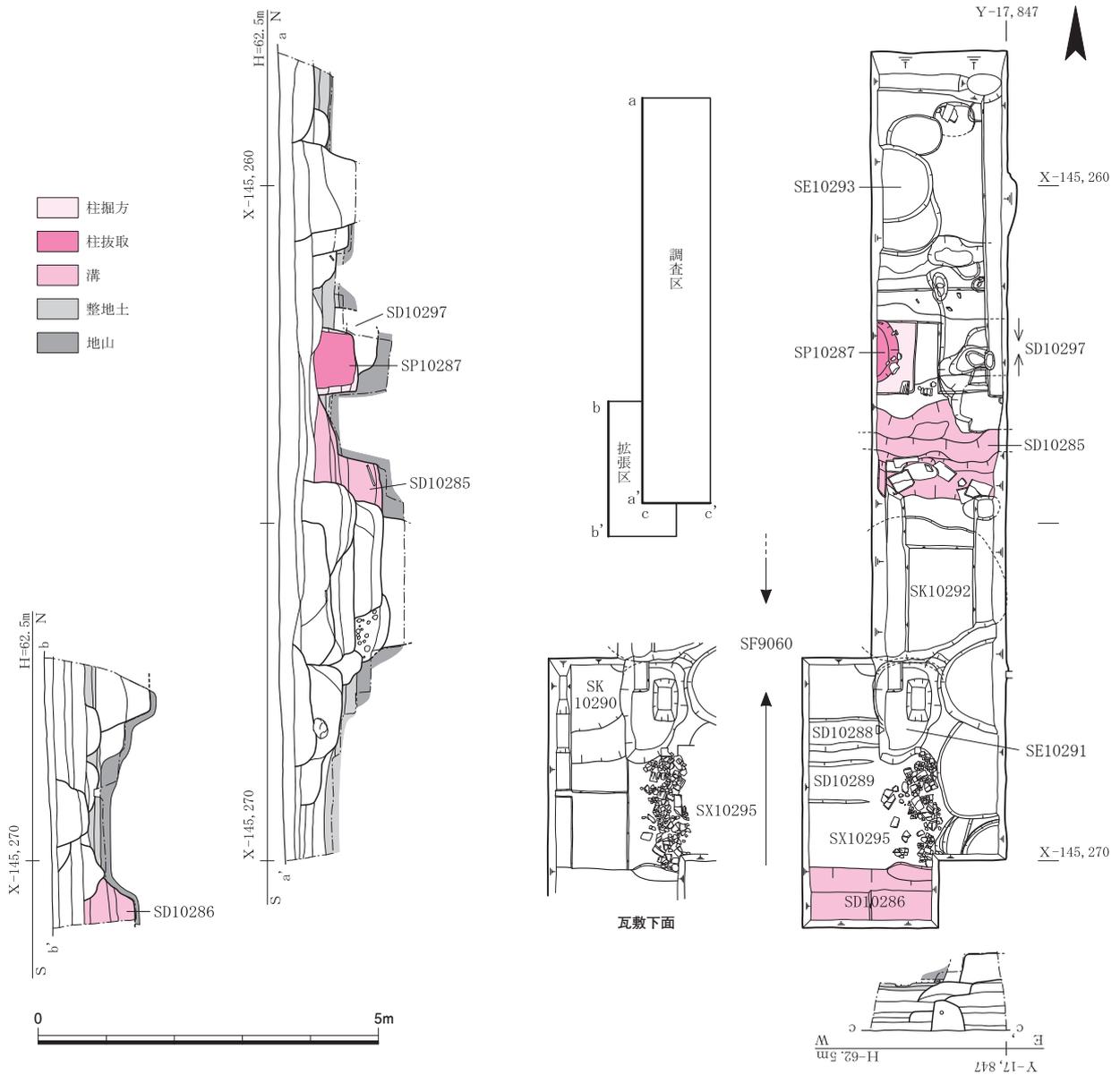


図257 第504次調査区遺構図 1:100



図258 瓦敷SX10295検出状況(北東から)



図259 二条条間北小路南側溝SD10285護岸用瓦出土状況(北から)

の南北側溝である可能性が高い。ただし、後に詳述する  
とおり北に数mふれる。これが道路側溝ならば、この両  
溝間の整地土上が二条条間北小路SF9060である。両溝  
心は不明だが、両溝の北肩間距離は6.0～6.3mである。

**柱穴SP10287** 調査区北端から南に4m付近で東半のみ  
検出された。南北1.1m、東西0.5m以上、深さ60cm。

柱抜取穴、掘方ともに土器、瓦片を含む。抜取穴から  
「宮寺」と記された墨書土器が出土した。SD10285の北  
にあり、同整地土から掘り込まれているため、同時期の  
ものと考えられる。場所から東西堀と考えられるが、南  
北堀やその他建物である可能性も捨てきれない。

**東西溝SD10288・SD10289** 拡張区で検出した素掘溝。  
幅0.7～0.75m、深さ約20cm。調査区東方に続く。

#### 下層遺構

**瓦敷SX10295** 調査区南端の地山上面で検出した。南北  
3.5m以上、東西1.0m以上の範囲に軒平瓦、平瓦、丸瓦  
が敷かれる(図258)。少なくとも2面あり、40点以上の  
瓦を確認した。特に下面の瓦敷は南北方向に帯状に分布  
するが、掘込みなどは確認できなかった。瓦だけでなく、  
土器の小片も出土しており、屋根から直接落ちたもの  
とは考えられず、上面は面を揃えているので、意図的に  
敷かれた可能性が高い。なお、軒平瓦の型式はすべて  
6667Aである。

**東西溝SD10297** 幅1.0～1.2m、長さ2.0m以上、深さ約  
60cmの素掘溝。溝のほぼ中央、埋土上層から径20cmほど  
の礫が出土しており、少なくとも2点はならぶ。礫との  
直接的な関係は不明。SP10287よりも確実に古い。

**土坑SK10290** 拡張区の地山上面で検出された。径1.3m  
以上、深さ40～80cm。二段掘りになる土坑、あるいは2  
基の土坑である可能性が考えられる。

#### 近世以降の遺構

土坑12基、井戸4基を検出した。いずれも陶磁器片な

ど近世以降の遺物を含む。以下主な遺構を記述する。

**大土坑SK10292** 調査区中央の表土下で検出した。径2.7  
m以上、深さ150cm以上。陶磁器片、瓦片を含む。数回  
の掘り直しが認められるが、下層でも近世の磁器片が出  
土した。SD10285の南肩を切る。

**井戸SE10291** 調査区南方で検出した石組井戸。掘方は  
1.4×1.0mで、深さ約120cm。下層に曲物を入れる。

**井戸SE10293** 調査区北方で東半のみを検出した井戸。  
掘方は上面で径約1.5m、深さ90cm以上で下方にむかっ  
てややすぼまる。埋土に曲物片を含む。(芝康次郎)

## 4 出土遺物

### 土 器

土師器、須恵器のほかに中近世の土師器や陶磁器な  
ど、コンテナ4箱分の土器が出土した。このうち図化で  
きたのは、奈良時代の須恵器4点である(図260)。

**須恵器** 1は、SD10297出土の須恵器杯B I。復元口  
径20.8cm、器高7.2cm。奈良時代前半の所産か。2は  
SP10287掘方出土の鉢A。推定口径19.6cm、復元すると  
器高は11cm程度か。

**墨書土器** 3は、杯Aないしは皿Aと推定される破片で、  
底部外面に「宮寺」の墨書がある。4は杯Bの底部破片  
で、これも底部外面に「坏」と墨書する。3、4ともに  
SP10287から出土。(青木 敬)

### 瓦 磚

第504次調査で出土した瓦磚類の一覧を表41に、代  
表的なものを図261に示した。1は6285Aで1点出土した。  
2は6667Aで9点出土し、うち5点が瓦敷SX10295に用  
いられていた。8点が段顎I Lで1点のみ直線顎であ  
り、范傷の進行から直線顎のものが遅れて作られたこと  
がわかる。1・2ともに歌姫西瓦窯産で、これまでも法  
華寺旧境内から多く出土している。この組み合わせは

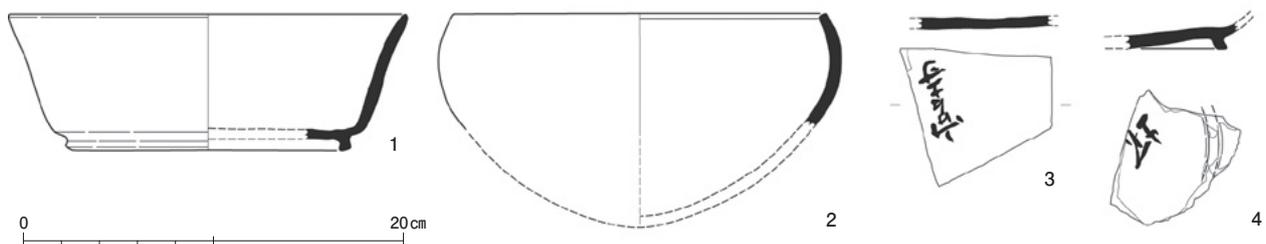


図260 第504次調査出土土器 1 : 4

表41 第504次調査 瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6285	A	1	6641	F	1	平瓦(へら書)	1
型式不明(奈良)		2	6667	A	9	平瓦(刻印)	2
古代~中世		1	6711	A	1	鬼瓦	1
中世		1			1	熨斗瓦	1
近世		2			12	隅木蓋	3
					1	道具瓦	4
						目板瓦	2
						小型瓦	1
						土管	6
計 7			計 25			計 21	
丸瓦			平瓦			磚	
重量	36.691kg		164.618kg		0.764kg		
点数	221		1056		1		

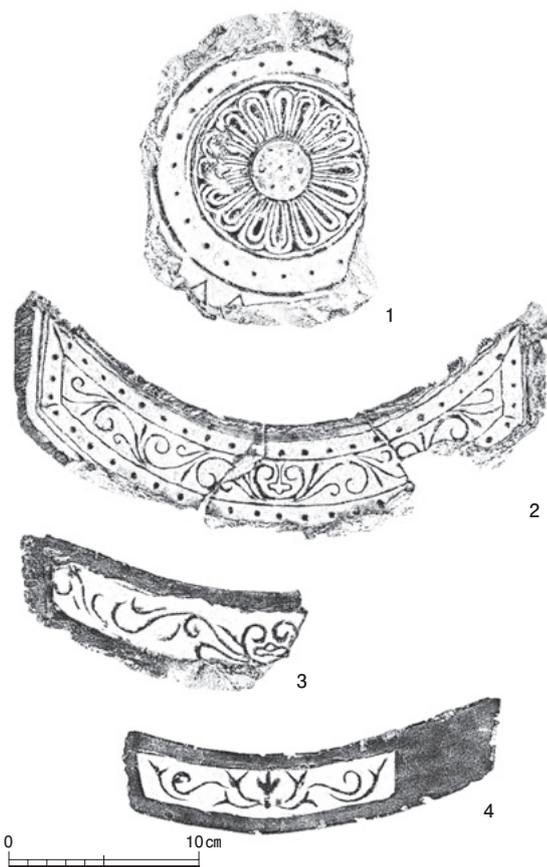


図261 第504次調査出土瓦 1 : 4

平城宮・京出土瓦編年のⅡ-1期に位置づけられ、法華寺前身の光明子邸所用瓦とされる。そのほか、大土坑SK10292から3が、井戸SE10291上面の瓦溜から4が出土した。

(川畑 純)

## 5 成果と問題

今回の調査成果は、二条条間北小路の位置や設定時期

に関連する問題を提起している。

**二条条間北小路の位置** 先述のとおり、SD10285およびSD10286が二条条間北小路南北側溝とした場合、二条条間北小路の位置が過去の調査による想定位置よりも北にふれるという問題がある。以下では過去の調査と比較してこの問題を明確にしておきたい。なお、本来は側溝心の座標を比較すべきだが、第504次調査区ではその値が不明なため、北肩の座標を比較する。また、条坊方位のふれについても0°に限りなく近い数値と仮定する。

第412次調査区で検出された二条条間北側溝SD9061と目される長さ約4.0m、幅0.7~1.1mの素掘溝(『紀要2007』、149頁)の北肩の座標(X=-145,267)とSD10285の北肩の座標(X=-145,263.8)では、後者のほうが約3m北にふれる。一方、今回の調査区から約300m西方の阿弥陀浄土院およびその北側の調査(第80次、第123-4次、第141-1次)では、二条条間北小路の南北側溝と想定される溝を検出している。北側溝北肩の座標値はX=-145,267前後、南側溝北肩でX=-145,275前後である。やはりSD10285、SD10286の北肩は北に3m前後ふれる。これら周辺調査の状況から、SD10285とSD10286とを二条条間南北側溝とした場合、3m以上北にふれることになる。この理由として、次の2つが想定可能である。1つは第504次調査区付近で、北側に道路が張り出している可能性、もう1つは付け替えの可能性である。後者については、過去の調査から想定される位置に近世の大土坑があり、これに切られている可能性は否定できない。

**二条条間北小路の敷設時期** 次に時期の問題を考えたい。遺構の重複や整地土との関係から、下層遺構SD10297、SK10290、SX10295→上層遺構SF9060、SD10285、SD10286、SP10287という前後関係がある。

二条条間北小路の敷設は、瓦敷SX10295の以降(あるいは同時)になされている。瓦敷の性格は不明だが、敷かれた軒平瓦は法華寺前身建物の所用瓦であり、Ⅱ期前半(720年以降)に位置づけられる。少なくともこの瓦敷以降に、二条条間南北側溝が掘削されたことは確実で、同時期に柱穴SP10287も掘られる。先述したように、溝の付け替えの問題があるが、いずれにしてもこの両側溝が機能していた時期は、720年以降であることは間違いない。

今後、周辺の調査によってこれらの問題について手がかりが得られることを期待したい。

(芝)